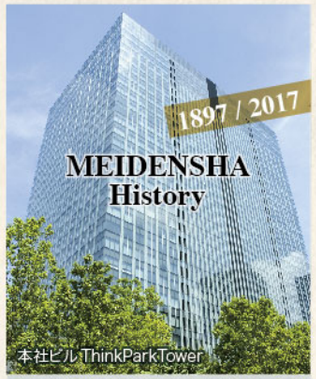
池と水田の地に建てた明電舎大崎工場の披露式(大正4年)

ものづくり120年の歴史の大半を、大崎と共に築いた「明電舎」

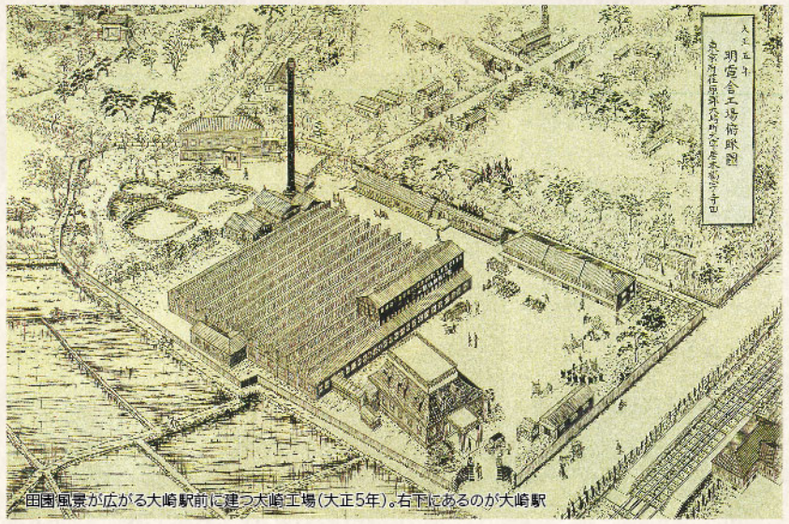
過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと 大崎」のDNA(原風景)を訪ねる『大崎今昔物語』。
その第十九話は、大正2年(1913年)に大崎駅の隣接地に工場を創設、以来こんにちまで、ものづくりのまち大崎の発展を、まちと一体となって支え続けてきた「明電舎」の話。今年創業120周年を迎える大崎の歴史的企業の歩みを見つめます。

明治30年に初代社長・重宗芳水(しげむね ほうすい)氏が、配電盤や電灯器具の製造などを目的に中央区に創設した「明電舎」。後に〝モートルの明電舎〟として広く知られた電動機(モーター)メーカーとして、また発電機や変電機器の製造でも実績を積み上げるインフラ企業として発展。さらに、その成長を飛躍的なものにしたのが、製造拠点の〝新天地〟大崎でのスタートでした。一方、当地の大崎のこの地はまだ池と水田の〝未開の地〟、そこには順調とはいえない誕生の苦しみもありました。



本社ビルThinkParkTower

1897	京橋区(現中央区)船松町にて創業
1905	同区明石町に工場移転
1913	大崎工場創設
1935	名古屋工場創設
1937	品川工場創設
1939	西尾工場(愛知)創設
1961	沼津工場創設、変圧器工場が稼働
1972	パワートロニクスを掲げる
1977	太田工場(群馬)創設
1993	大崎に総合研究所を建設
2003	大崎工場閉鎖
2007	ThinkParkTower完成、本社を大崎に移転
2017	創業120周年を迎える


田園風景が広がる大崎駅前に建つ大崎工場(大正5年)。右下にあるのが大崎駅

大崎新工場の活気あふれる作業風景。当時の明石町から大崎への移転記念に作られた絵葉書帖より(大正4年)

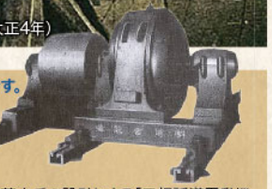
白物家電の走り、洗たく機
当時の三種の神器の一つ、洗濯機も明電舎から。これらは委託生産によるものの、知名度向上の効果も

昭和36年発売の明電テレビ
当時の家電ブームに乗り、次々に開発された明電舎商品。TVまで手掛けていたとは以外!

昭和の一時期、身近な家電製品も手掛けた明電舎! あまり知られていない話です。

◀二重構造により、みそ汁も同時に作れる昭和6年の「ユートピア電熱炊事機」

◀戦時中のヒット製品となった、昭和18年の「電気七輪」


重宗芳水氏の設計による「三相誘導電動機」

創業の地から、大崎の新天地へ

創業の地、中央区で、社業の拡大とともに湊(旧・京橋区船松町)から明石町へと工場を移転し、日本の電気産業の発展と共に歩み始めていた明電舎。その後、電動機や発電機の大規模化への必要性から、より広い製造工場への移設が求められます。これに向けて大正2年(1913年)、大崎2丁目(旧・大崎町大字居木橋)の約6000坪の土地に、明電舎の屋台骨となる大型工場を創設、ここから大崎のまちの発展と一体となった「明電舎」の新たな歩みが始まります。

重宗 芳水 氏

電気機械技術の「国産化」を目指すところから

創業当時はまだ、電気機器のほとんどを輸入品に頼っていた時代。技術の国産化を目指す明電舎は、手探りで自前の技術開発に邁進します。明治39年には、重宗芳水氏が独自に開発した「三相誘導電動機」を、またその後も「明電モートル」の名で知られた多くの電動機や発電機を開発。明電舎の技術的努力が次々と実を結んでいきます。大崎新工場の創設は、こうした発展の延長線上にあり、時代の要請に即した電気機器の大型化、大容量化に応えるものでした。やがて大正2年には念願の大崎新工場が完成、ここに新天地での出発が始まったのでした。

池と水田の地に建てた大崎工場

一方、当時の大崎のこの地は、まだキツネやタヌキも出没する池と水田の地。電力事情も極めて悪く、隣接の大崎貨物駅から車両が発車するたびに工場内の電灯が一斉に暗くなる始末。また土地の整地も大変で、水田や池の埋め立てに大量の土砂を運び、さらに飲み水も少ないため、大井戸を掘り飲料水に充てる、といった状態でした。同じ大崎でも、目黒川の水運に着目して川沿いに進出した他の多くの企業と異なり、明電舎が求めた場所はまだ〝未開の地〟。これは、明治34年に開設された隣地の大崎貨物駅がもたらす発展性に着目した結果でした。

芳水小学校の学舎を寄贈

大崎駅を物流拠点として、明電舎はその後、地の利を生かしながら世界インフラ企業へと飛躍的発展を遂げていきます。一方で、地元大崎との絆をより大切にした地域貢献にも尽力。終戦後の大崎の教育事情の悪さに心を痛めた重宗芳水氏とたけ子夫人が、私財を投じて寄贈した「芳水小学校」の学舎は、明電舎と大崎との繋がりを知る上であまりにも有名な史実となっています。その後、2003年の終業まで90年もの歴史を大崎と共有しながら歩んだ明電舎大崎工場。その絆は、再開発のまちThinkPark(本社)の偉容へと姿を変えた今でも変わることがありません。

重宗芳水氏の名のついた「芳水小学校」

■写真・資料出典:株式会社明電舎